博物館のまわりの

これな～んだ？新聞

No. 12
平成 24 年４月号

森の中は春本番。木々の芽吹き、虫たちの羽化、鳥たちのさえずり…。たくさんたくさん、見るものがあります。そんな中で、今回は博物館隣の林で春植物を観察します。また、市内では限られた場所でしか見られない、“ほんとうの”カントウタンポポ（もともと日本にあったタンポポ）も見てみましょう。

◆可憐な春植物　フデリンドウ

高さは６、７センチにしかならない、典型的な春植物です。春植物とは、花が終わって結実すると、地上部が消えてなくなってしまう植物のことです。毎年４月初旬から中旬にかけて咲きます。かつては明るい雑木林にふつうに見られましたが、林床が管理されずにヤブになったり、常緑樹の暗い林になったりすると消えていってしまいます。そのため現在、相模原市内では里山の管理がされている場所などに残る貴重な植物となってしまいました。ただし一年草で発芽率は良く、環境条件さえ合っていればたくさん増えていきます。

フデリンドウ

◆ふしぎな名前　ミミガタテンナンショウ

かわった名前の植物です。テンナンショウとはマムシグサのなかまで、白く丸い球茎を、天南星（南極老人星＝カノープス）に見立てた中国での名前とのことです。この種類は、仏焔包（筒状の花のように見える部分）のエリが大きく張り出しているので、「ミミガタ」とついたようです。相模原では低地の林や段丘崖にも見られますが、県内では西部の山地にしか見られない、偏った分布の植物です。花には雄と雌があり、雄花には筒の下の方に穴があいていますが、雌花にはあいていません。なぜなのでしょうか？

ミミガタテンナンショウ

◆正真正銘の、カントウタンポポ

タンポポは、花が終わって結実しても１年じゅう地上部が残るので、いわゆる「春植物」とは言いません。しかし、この留保地では正真正銘のカントウタンポポが自生しているので、しっかり観察しておきたいと思います。なぜ正真正銘なんて言うのか？それは最近、セイヨウタンポポとの雑種と思われる個体がとても多いからです。10 年ほど前までは、繁殖方法の違いから両種は雑種を作らないと言われてきました。しかし現在、セイヨウタンポポの花粉がカントウタンポポのめしべに受粉してつくられた雑種がひろがっていることが明らかになりました。この留保地では、花粉の分析などから、雑種ではないカントウタンポポが多く自生していることを確認しています。

カントウタンポポ

次回のお知らせ
ミニ観察会：4 月 30 日（祝）11 時から
新聞 No. 13 も観察会にあわせて発行します。

相模原市立博物館